

大沼法竜著

法界

敬行寺發行

はしがき

(聖八一) 道俗時衆等、おのおの无上心を發せども、生死甚だ厭い難く、仏法復欣
い難し、共に金剛の志を發して、横に四流を超断せよ。僧侶も俗人も真剣な无上菩
提の心を發しても、人世の醜悪さに愛想がつきず、淨土の深妙さに忝慕の情が湧かな
いのに、嫌や嫌やながら得度をし申訳に法衣を纏うているようでは、宗義の發揮も宗
門の發展の出来ないのも当然であらう。

真如には依言真如と離言真如とが有る。言葉によらなければ導かれぬが、言葉で
離れなければ真理に到達することは出来ない。釈尊の十大弟子が、釈尊の教えられる
真理を如何に味わうか、自督を述べようとて、最後に文殊菩薩が、真理とは、文字の
相を離れ、言辞の相を離れ、心念の相を離れたものだ、と宣べられた時、他のお弟子
達は流石は智慧第一の文殊菩薩だと称讚した。すると釈尊は側の唯摩居士に向つて

唯摩は真如をいかに味わうかと問われた時に一言もなし。他の弟子は行詰つたかと思つていと釈尊は唯摩の答が一番よい。文字、言辞、心念の相を離れているのなら无言が一番よいのだ。それで唯摩の一黙雷の如しと言ふのだが、不思議にも判らんから不思議と言ふのと、判つて判つて判り抜いて言葉に掛らないから不思議と言ふ世界と有る。

太陽の光線は平等であつても受ける場所で感度が違ふ。真理は平等であつても根機のいかんによつて開覚に遅速が有る。他力廻向の名号に差別はないけれども、受ける機類が一樣でないから、平等の証果にはならない。だから祖師は真仏土巻に（聖、一五）「良に仮の仏土の業因干差なれば、土も復次に干差なるべし。」と蟹は甲羅に応じた穴を掘る、人間は誰でも一歩先の事を言はれても判らないから何時でも何処でも自分の境地が真実であつて他の者は皆、異安心だと心得ている。盲人が巨象を摩つていて自分の主張に固執しているようなものだ。開眼の人から見れば可

笑けれど、本人は全体は判らないのだ。仏はそれを、調機誘引して徒仮入真、從真垂仮して衆生を教化して下さるのだ。飯を飯と知らされた者は真に到達させられているのだ。真心徹到し、心眼を開かして頂いた者は、真仮の分齋を鮮かに説いて、羊鹿牛の三車を捨てさして巨象の車に導くのだ。

八万の法蔵は説かれたけれども詮じつむれば唯説弥陀本願海に帰するのだ。八家九宗と門戸は張つてあるけれども、諸経所讀多在弥陀に帰するのだ。

三三の法門も知らず、名号に向つておれば皆第十八願の絶対他力に帰したように自惚れているのだ。蓮師がもろもろの雜行雜修自力の心をふり捨てと仰有れば皆ふり捨てて專修正行の行者に成つた積りで自惚れているのだ。

御言葉を模倣して猫を冠つているのを无我の道俗のように自惚れ、学問して理窟が合えば一流の大徳と心得ているのだ。聖人の御苦勞を聞いて感情が涙を流せば他力の信仰のように思い、法を眺めて有難がるのを真宗の正意と心得ているのだ。

つきりせん、これでよいか、ひよつと墮ちはせぬか、ああは仰るけれども、と二の脚踏むのが皆疑いだ。これが晴れた時でなければ第十八願の行者ではないのだ。

ここ迄照育するのが調熟の光明であり、果遂の誓いの腕前を、道俗が知らず識らずの間に發揮しているのが第二十願の願功である。

浄土真宗の極意、絶対他力の真髓は、親子の名乗の挙つた一念の信の妙諦である。

凡夫に一念が判るか。信仰の入口にいては判らない。この一念を突破さされた人でなければ信仰は徹底していない。信仰が徹底した人でなければ二種深心を体得していない。二種深心を体得した人でなければ信樂開發していない。信樂開發した人でなければ疑情は断除されていない。疑情が断除された人でなければ、信前信後の水際は立たない。信前信後の水際の立たない人は真仮の分齋を語り切らない。真仮の分齋を語り切らない人は現生不退を知らない。現生不退を知らない人は死んだらお助けしか説き切らない。死んだらお助けなら平生業成、撰取不捨、即得住生はお留守だ。

唯信独達の法門は何処で立つのだ。この發揮が出来なければ浄土真宗ではないのだ。真宗は他力だと合点する人は多いけれども、久遠劫から流転を続けている本性に驚いて必死の求道をさされて開發した人は殆んどいないのだ。その境地を突破させられてこそ、聖人の本意にかなうのだ。弥陀釈迦二尊を生かすのだ。

真宗の道俗は他力の名に誤魔化されて、他力不思議の境地を諦得する事を知らないのではなからうか。観念の遊戲に狂わされ、机上の空論に現を抜かして、実地の求道を知らないのではなからうか。自分が邪見橋慢の悪衆生である事を反省させられていながら難中の難の障壁があることが判らないのではなからうか。自分が逆謗の屍である事に気がついていないから、極難信の鉄壁の有る事を知らないのではなからうか。これを突破された人がいないから真の易さを知らないのだ。

(聖、一一六) 然るに濁世の群朋穢悪の含識、乃し九十五種の邪道を出でて、半満権実の法門に入ると雖も、真なる者は甚だ以て難く、実なる者は甚だ以て稀なり。疑な

る者は甚だ以て多く、虚なる者は甚だ以て滋し。更に第十八願の極意を究める者は九牛の一毛だ。

唯浄土真宗と言う城廓に隠れて、素直に聞いたと蓋をしている榮螺が、世の中の長足の進歩には見向もせず、新興宗教の発展には眼を閉ぢて、最高の宗教だと自惚れて威張っていたら、時代の波から取残されて、静かになつて蓋を開けて見たら、この榮螺一箇参拾円の捨売りになりはせぬか。

念仏者は無碍の一道なり、自由の天地、无我の境地、本願や行者、行者や本願、身も心も南无阿弥陀仏、信受本願前念命終、即得往生後念即生、万歳万歳万々歳、再び迷わぬ身にさして頂いた嬉しさには、最後の一息まで真仮の進軍喇叭を吹き続けるであらう。

☆

七里和上は学問は柄、信仰は槍の穂先と言われたが、大沼は学問は定規、信仰は剃

刀そりと思う。学問がくもんの定規じようぎが正ただしくなかつたら浄土真宗じやうどしんしゆうせんの線せんが曲まがる。信仰しんかうの剃刀かみそりが赤錆あかさびであつたら真仮しんけの水際みづぎわが立たない。此この度たび七百回忌しちひやくかいの記念出版きねんしゆつぱんとして、真仮しんけの分齋ぶんさいを分明みやうとに説といて、聖人しやうにんの銅像どうざう鑄造ちゆうぞうに一金千円きんせんえんの懇志こんしを頂いただいた方に頒布はいふしました。それでこの書物しょぶつには聖典せいてんを附録ふろくとして差上さしあげます。本文ほんもんと聖典せいてんの頁ページとを対照たいしやうして見て下ください、大沼おおぬまが勝手かotteな事ことを言いつていたのではない、聖典せいてんに明記めいきしてあり、定規じようぎと一致いつちする事ことが判わかります。この度たびは聖誕せいたん八百年ねん「信心しんじんの溝みぞさくらえ」として再版さいはんします。

△

三千年さんぜんねんの古いにしえの仏舎利ぶつしやりが各地かくちに安置あんちされて、御教化ごきやうけを垂たれさせ給たまうが如ごとく、七百年しちひやくねん前の聖人しやうにんの御真骨ごしんこつが大沼おおぬまの微衷びちゆうを察さつし出現遊しゆつげんあそばして、自由じゆうの活動かつどうを応援おうえんして頂いただいている事ことを涙なみだと共に感謝かんしゃしている。協力きやうりよくして頂いただいた同行どうぎやうの芳名ほうめいを銅板どうばんに記入きにゆうして、御真骨ごしんこつと共に鑄造ちゆうぞうして、第一基だいいつきを御真骨ごしんこつを分与ぶんよして下くださつた萩市はぎしの明円寺みやうえんじに第二基だいにきを広島ひろしまの親鸞しんらん会館かいかんに、原型げんけいを八幡はたに安置あんちする為ために、七百回忌しちひやくかいの当り年あたどしの昭和しやうわ三十六年さんじゅうろくにんいちがつ一月に

鋳造する。

△ 聖人の晩年の御木像は各地に散在してあるけれども、法然上人の膝元で、信樂開発された歓喜の座像を鋳造し度い念願だから、叡山の大乘院、黒谷の法然院、洛北の真如堂を拝観し、大乘院のお姿を基本として原型を造つて頂く事にした。

△ 不思議ではないか、折も折、時も時、九年以前から毎年別府法座を永福寺で布教していたながら、西村法剣和上が奉持して来ておられた、玉日姫恵信尼の御遺髪と御木像の有る事を念頭に置いていなかった。昭和三十五年九月二十九日の最後の一席で、聖人の御真骨の話をしている時、不図思い出して、御遺髪を分与して頂いたら聖人の御真骨を分譲してもよいと講演したら、聴聞していた住職も坊守も喜色满面、御遺髪を半分頂いたから、その半分を萩市の明円寺に奉安する。

これで聖人の御遺骨と恵信尼の御遺髪とが三ヶ所に安置さるる事になった。その縁起は最後に記す。

△

世界広しといえども親鸞聖人の御真骨と玉日姫の御遺髪とを納めて鑄造した銅像があるだらうか。不思議、不思議、不思議の中の摩訶不思議、総攻撃を物ともせず、世界の毀誉褒貶を超越して、如来聖人の真意を發揮しているから、去る昭和三十一年十一月六日と七日の再度の夢が、聖人の御真骨と、玉日の姫の御遺髪として御二方が姿を顕はして私を応援して下さるのだと感涙に咽んでいる。